BOOKS MUNOVEC

翼あるモノ

＜プロローグ＞
　建物内にけたたましくサイレンが鳴り響く。
『非常事態発生、非常事態発生！！各室室長は情報室まで来られたし。繰り返す。各室室長は至急情報室まで来られたし……！！』
　『名残（なごり）調整室』と書かれた表札の部屋では、先程のサイレンやスピーカーからのアナウンスの騒音にも動じず、『教習所通信』と書かれた雑誌を顔の上に広げ、一人の長身の男がソファに横たわっていた。「……も、み、ぢ！！」　ドスン！！「はぅっ」　不意にみぞおち辺りにめり込む落下物に奇声を発した男…紅葉は、その後しばらく身体をくの字に折って痛みに耐えていたが、次々と繰り出される落下物の技に耐えかねてソレを抱え上げた。「……おはようございます、小梅さん」　嫌々をするように紅葉の腕の中で暴れる小梅は、まだ歩き始めて間もない幼児だ。「小梅さん、寝ている人を起こす時はもう少し優しくしましょうね。ジャンピングスクワットはお部屋の外……で」　顎に蹴りを喰らってその場に膝を付いた紅葉の腕から逃れ、小梅は部屋を駆け出していく。「あーらららぁ～。お転婆に磨きかかったっスね～」　廊下を駆けていく小梅を見送りながらキシシと笑う少年大和（やまと）を睨みつけた紅葉は、顎を擦りながら立ち上がり窓辺へ寄った。　表のグラウンドでは、年の頃数多な教習生達がランニング中だったが、その列を遮って小梅は、グラウンド中央の砂場付き滑り台へ突進していく。
　ヒュー。　隣に来て共に小梅を見つめていた大和が口笛を鳴らした。　小梅は、飛んでいた。
　その背に薄紅色の小さな羽根を出現させ、フワリと滑り台の天辺へ降り立った。『おおぉー』と教習生達からも拍手が起こる。「流っ石、生まれついての『色つき』、エリートは違うっスねぇー。なんてったって歩くより喋るより先に飛ぶことを憶えたってんスから！」　嬉しそうにこちらに手を振って滑り降りていく小梅に笑顔を返していた紅葉は、視線を教習生達に移した。　彼、彼女らの背には、半透明な白い翼が見える。それを自由に消したり、出現させたり出来るようになると『翼』と呼ばれる存在に格上げされる。　その翼の色は大抵白いが、稀に『色つき』と呼ばれる白以外のカラーの翼を持つ存在が現れ、彼、彼女らは例外なく何かしらの特殊能力を持っていたため、同じ翼達の中でも特別視されていた。　大和は色つきではない。　紅葉は淡いオレンジ色の翼を持っていた。「……で。大和君、小梅を僕の腹に放り投げてまでしたかった事は何なの？」　『あちゃー、ばれてたんスか？』頭を掻きながらニシシと笑う大和は、真面目な顔になって踵を鳴らし敬礼すると言った。「名残調整室室長！情報室より緊急召集がかかっております！急ぎ本社へお向かい下さい！！」　ソファに戻って御茶請けのお菓子をつまんでいた紅葉は、突然の事に咽喉を詰まらせ胸を叩いた。「……ばっか、お前、それ早く言えよ！！」　大急ぎで既に冷め切ったお茶を飲み下し、立ち上がった彼はその背の翼の発光を強めた。「お前、小梅連れて後で来い！」　言うが早いか、紅葉の姿は掻き消えた。彼の特殊能力は瞬間移動のようだ。　これまた口笛を鳴らした大和は、窓を開け放って足をかけた。「さあ、事件のはじまりはじまり」
　そして、飛び立った……。

＊　　＊　　＊

人は死ぬと霊体となり、通常ストレートで天国へと召される。　しかし自殺した者、現世に強く心を残したまま死んだ者、罪を犯した者などは『名残』と呼ばれる翼を持った霊体となって現世に残される。　そうして残された彼らはその業に従って、ある時は『死神』の役割を担い、またある時は『妖精』と現世で呼ばれるモノの如く自然界で働き、またある時は『調整』と呼ばれるモノ（これは霊体となった者達が付けた呼称だが）となり名残の選別、管理、統括する役割を担う。　名残のほとんどがこの『調整』係となるのだが、もちろん霊体となって間もない彼らがそういった『あの世』の事情など知っている訳もなく、そんな新参名残にあの世の諸々を説く学校があった。　それが『「翼」教習所』だ。　『翼』は名残の級が上がった霊体で、光り輝くその美しい姿を現世の人々は『天使』と称すのだろうが、しかし実際は「死神」的要素が強く、残念ながら天使と思い彼、彼女らを見たその瞬間に、その人の死は決まっているのだ。　そもそも、あの世事情で言えば、天使も役割としては死神と大差は無い。嫌な役目、汚いところ……、そういった段階が済んでから現れるのが天使、というだけだ。あるいは寿命でストレートで天に召される際の先導役、とでも言おうか……。　とにかく、彼らは皆、調整室の一員ということだ。

翼教習所名残調整室は、いわば死後の世界においての総合受付のようなものだ。　誰が、どんな場所で、どういった死に方をしようとも、天国直行パターンでない限りは、必ず調整員の誰かが迎えに上がる事になっているのだ。　しかし、稀に、そういった理から外れる事案も起こる。「……あら、紅葉さん、随分早いお着きですこと」　会議が始まっていたとしても何食わぬ顔で席に着いていようと自分の席に瞬間移動してきたのが裏目に出た。　いつも隣に座る巨体のノンさんこと『環境対策室』室長ジュノンが席におらず、何やら申し訳なさそうに自分の正面に立ちティーカップを差し出していたから、隠れ蓑にするつもりだったのに丸見えだった。「おやおや、本日は立食形式でしたか……」　カップを受け取りながら周りを見回した紅葉は苦笑した。　『情報室室長』の銀杏の趣味はお茶なのだが、室長達を束ねる立場でもある彼女の部屋での定例会議や、こういった緊急招集時、あるいは普段何気なく立ち寄った時でさえ必ず饗される彼女お手製の洋菓子が、紅葉は苦手だった。「ええ。本日は余り時間がありませんから……簡単な物でごめんなさいね」　『それでも出るんだ……』げんなりする紅葉の横で、所内随一の甘党『教育対策室』室長の桜が歓喜の声を上げた。「ふわぁ～あ、フィナンシェじゃないですかぁ？ぜぇ～んぜん、簡単じゃないですよぉ～！私大好き～っ」　『ほほほ…』と嬉しげな銀杏は、「本当に簡単なのよ。カスタードを作る時には必ずこれも出来ちゃうのよね～、カスタードには卵黄、これには卵白しか使わないから……」　一つ、二つ、部屋に咳払いが響く。　見るとレーダー前に陣取る情報室のインテリ隊が、紅葉に目で合図を送ってくる。　脱線女王をサポートする有能な彼らが、この教習所を回している……かつてから感じていた紅葉は『ああ～、本当に美味しかったなぁ～』布巾に包んだフィナンシェはポケットに忍ばせて、銀杏に微笑みながらインテリ隊の方へ歩を進めた。「おお！なんだ、この不可解な点滅を示すコレは！？」　若干ワザとらしくはあったがそうも言っていられない。　事実、『色つき』の出現を示すレーダーのその様子は異様に思え、紅葉の表情はすうっと落ちていった。「……あ、消えた！？」　桜が叫んだ

かと思えば、「いや、こっちだ！」　幅六メートルのスクリーンを中央から左へ右へ……。室長達が見つめる中、その紫色の点滅は時間を行き来していた。　尺を最大にしている現状態では、左右間で時間軸十年分といったところだろうか……。「この色つき、時空を統べる者のようです……それに」　全員が張り付くスクリーンからは少し間を置いたところにいた銀杏は、持っていたカップを助手に預け言った。「どういった手違いからなのか、はたまた稀なる事案かは分かりませんが、我々と一切関わる事なく数十年を現世で生きています。……これがどういった意味をもつのか……」「……『乗っ取り』」　声の主を全員が振り返った。　『所内警邏室』室長の夜斗（やと）が、部屋の片隅にいつの間にか佇んでいた。「めずらしい……」他の室長達から囁きのこえ。「……まあ、随分久方ぶりですわね、夜斗。焼き菓子はいかが？」「結構」　手をかざし素っ気なく返した夜斗を一瞥し銀杏は言った。「……血の匂いがしますね」　出ていた手をコートの陰に隠して夜斗は口角を吊り上げる。「それは珍しかないだろ？」　カッカッカッと軍靴を鳴らしてレーダー前まで来た彼を、他の室長達は避けるように場を空けた。鉄と煤の匂いがツンと全員の鼻をつく。　全身黒ずくめの彼には正しく『死神』の名が相応しいように思え、警邏隊を死神集団と呼ぶ者達も多かった。「間違いない。過去のデータも確認した。一所に二十年……、いくらコイツの目が節穴とはいえ所を誤魔化し続けれる年数じゃねえ。故意か、事故か……確かめる必要がある」　『節穴』と言われた瞳を見開いて「心外だな」と笑った紅葉は、遅れて到着した大和から小梅を抱き取った。話を聞いていたのか、物凄い形相の大和は夜斗を睨みつけている。「……そうねぇ、じゃあ今回は僕と大和が先遣隊で現地に向かいましょう。故意の乗っ取りじゃないことを祈ってて下さいよ、ややこしいのは苦手なんでね」　紅葉が喋っている間に彼の肩まで上り詰めた小梅は、すぐ隣りに立つ夜斗の髪に一枚の枯葉を見つけ手を伸ばした。　刹那。　瞬時に遥か後方まで飛び退いた夜斗は、ギラギラした瞳で小梅を睨みつけた。その手には黒い刃の小刀。　途端に泣き叫ぶ小梅。「……俺に、触るんじゃねえ」　同時に腰のスタンガンのようなものを抜いていた大和の腕を掴み、彼を制しながら小梅をあやす紅葉は『やれやれ……』溜息をついた。「何もしませんよ……てか、小梅の恩恵はこの部屋に入った時から感じてるでしょう？……腕の傷、どうですか？それともそれが気に入らなかったかな？」　がばっと袖をまくって腕を擦る仕草をした夜斗は、まだ警戒を解いてはいなかったがゆるゆると刀を鞘に納めた。「ほらほら、大和君も……。まったく、手負いの獣じゃあるまいし、もうちょっと仲間を信用してくれてもいいんじゃないの？」「……ッハ！？仲間？」　腰に戻しかけた武器を握り再び夜斗へ火花を飛ばす大和の前に立ち塞がった紅葉は、指を吸いながらウトウトし始めた小梅を片手で抱きながらシィっと口に指を立てた。「そうです、家族といってもいい」　親が子供を諭すような優しい笑みで見つめ返された夜斗は、ツイっと視線を外した。　そんな態度がいちいち気に入らない大和が、縄張り争いをする犬のようにいつまでも夜斗を威嚇しているから、彼に眠った小梅を押し付けて紅葉はレーダーの紫の点滅を振り返った。
「……さて。この『色つき』は、どんな時間を、誰と、どんな風に過ごして来たんですかねぇ……？願わくば、それが優しい時間であらんことを祈るばかりです……」

（「タカイシ１」へつづく。）